

植民地主義の責任を自覚し、平和を求める沖縄に連帯するキリスト者の声明

「見よ、イスラエルの人々の叫び声が、今、わたしのもとに届いた。また、エジプト人が彼らを圧迫する有様を見た」（出エジプト記 3 章 9 節）

＜辺野古新基地建設は、人権、民主主義、環境、平和を破壊する＞

2015 年 11 月 17 日、国土交通大臣（日本政府）は沖縄県名護市辺野古新基地の埋立工事承認取り消し処分を取り消して「代執行」するため、埋立承認処分取消処分取消命令請求事件の訴状を福岡高裁に提出した。国と沖縄県との辺野古新基地をめぐる裁判闘争から一か月以上が経過したが、この間も辺野古においては真の正義と平和を希求する人々による抗議の座り込み行動が連日続けられている。しかし、その切実な声をかき消すかのように、12 月 4 日、ケネディ駐日米大使と菅官房長官は、米軍普天間飛行場の一部を 2017 年度中に前倒しで返還することで合意をした。返還されるのは、沖縄県内米軍専用施設のうちわずか 0.03%で、たとえこの合意が実現しても、普天間基地の危険性がなくなるわけではない。ましてや、沖縄県民の総意に反してまで辺野古に新基地を建設する理由にはならない。

必要条件である「公有水面埋立法」はその埋め立てが国土利用上、適正かつ合理的であり、環境保全に十分配慮されたものであることが前提である。沖縄県知事意見（2011 年）では生活環境や自然環境の保全を図ることは不可能だと断定しているが、沖縄防衛局は、普天間基地の移転先がなぜ辺野古でなければならないかについて未だ説明責任を果たしておらず、移設先が辺野古でなければならない根拠はまったく認められていない。また、生物多様性基本法や海岸法などに基づく「琉球諸島沿岸海岸保全計画」「生物多様性おきなわ戦略」に反するなど、埋立工事は地元地域の計画にまったく適わないものである。

辺野古新基地計画は、沖縄の人々の人権やその自己決定権に関わる重大な問題であり、まさにこの国の民主主義を根底から問う問題である。いまこそ日本政府は、このような沖縄の人々の痛切な声に謙虚に耳を傾け、何が真の意味で環境保全と平和につながる道であるかを根底から見直すべきである。

＜沖縄の歴史に学び、植民地主義の支配と歴史を終わらせなければならない＞

沖縄は、かつて清国、アメリカ、フランス、オランダと修好条約を結んで外交関係を有する国家として国際的に認知される、アジアでも独自性をもった国（琉球王国）であった。しかし、1609 年の島津藩による琉球王国武力侵略に続いて、1879 年、日本政府は軍隊と警察官を動員して首里城に乗り込み、琉球王国の廃滅と沖縄県の設置（廃琉置県）を宣告、琉球を日本に併合した。この「廃琉置県（廃国処分）」により、沖縄県という植民地が新たに設けられた。戦後の解放によって韓国と北朝鮮はそれぞれ独立したが、沖縄に至っては 70 年経った現在も日本の植民地のままである。日本政府はこの過程を「琉球処分」と呼ぶことで、琉球側にあたかも問題があったかのようにこれを処分したと主張する。沖縄はこの「琉球処分」により、日本の辺境の地として位置付けられ、その結果、沖縄戦、米軍基地の押し付けといった植民地主義が新たに生み出されていく。近代において沖縄は同化、皇民化政策、差別の対象であり、

この同化政策や皇民化政策は、日本による沖縄（という領土）保有の根拠づくりの役割を果たしてきた。日本にとって沖縄は、いつでも切り棄て可能な場所ではなく、太平洋戦争下、日本は本土防衛と国体護持のために沖縄の「捨て石作戦」を取行した。沖縄戦は、多くの住民を巻き込んだ唯一の地上戦である。そこで繰り広げられた日本軍による「住民集団自決」の強要、沖縄人虐殺などは日本（人）による差別の現れだといえよう。

戦後、昭和天皇は「沖縄に対する米国の軍事占領は、日本に主権を残したままでの長期租借の擬制に基づくものである」と述べ、沖縄への長期にわたる基地存続を連合国司令部に要望した（1947年）。このことから、アメリカの戦略だけで沖縄に基地が置かれたのではなく、実際はアメリカと日本の強い関わりによって米軍基地が拡大強化されていったことがわかる。1945年から71年まで沖縄はアメリカの軍事植民地になった。アメリカは「銃剣とブルドーザー」によって沖縄人の農業・生活用地を掠奪し、そこに基地を建設した。高等弁務官をトップとするアメリカ軍事体制のもと、沖縄人は権利を剥奪された状態に置かれる。基地によって土地(農地)を奪われた人々は、基地労働者、軍用地主となり、政治的経済的に米軍相手の仕事に従事するようになる。

沖縄は1972年の「復帰」で日本国内の一県になったが、実際上は「国内植民地」であり、今日まで搾取、差別、抑圧の対象とされてきた。その現実を示す核心的な事態が憲法九条と沖縄との関係である。憲法九条の「戦争放棄」条項は、沖縄を占拠している軍事基地を条件として成立した。「返還」「復帰」の言葉それ自体が植民地主義的な用語であり、この差別構造からの解放を我々は目指さねばならない。とくに性暴力は、構造的差別の現れでありながら、暴力の存在そのものが隠蔽されやすく、結果的に植民地的支配を強化する手段となる。このような差別的統合・支配が「植民地主義」であり、この植民地を独立させる形で切り離しながらなおも支配関係を継続するのが「新植民地主義」である。国際法上、「琉球処分」（琉球併合）は違法であるが、日本は未だに謝罪と賠償責任を果たしていない。我々日本人は、歴史的構造的に「沖縄の植民地支配者（植民者）」であることに深く想いを致さねばならない。

1995年の米兵による少女への性暴力事件後、日本政府は開発(お金)によって基地を沖縄に押し付け、基地と開発をリンクさせた施策を打ち出す。植民地主義の体制はつねに人間と人間性を破壊する。このような植民地主義の支配体制と歴史を終わらせることが、沖縄の解放であり、日本とアジアの解放につながるものと考えられる。

＜沖縄をはじめ、アジアの人々の隣人として生きる責任を負い、共同体(神の国)実現を目指す＞

日本政府は「抑止力」という国益と振興開発とをリンクさせて、沖縄に基地を押し付けてきた。戦後日本の高度経済成長を実現させた要因の一つは、日本が沖縄に基地を押し付け、多大な基地負担、軍事費負担を免れたことにあると言われている。日本の「平和」は、したがって、沖縄の犠牲を抜きに考えられない。この米軍基地を固定化しているのが振興開発である。

1972年に沖縄が日本に「復帰」して以降、約10兆円の振興開発資金が投入されてきた。しかし、「本土との格差是正」の名の下、珊瑚礁の埋め立て、インフラ、各種施設の建設など、沖縄の振興開発は、沖縄の植民地化の完成のためのものだった。今も続く植民地支配は、民族を従属させ、その生活やいのち、尊厳を破壊し奪い取ったという意味において、重大かつ取り返しのつかない罪であると考えられる。このような罪を犯した国の人間は、この罪をどう自覚するのか。

富坂キリスト教センター（秋山眞兄委員長）は、沖縄宣教研究所（饒平名長秀所長）と共同研修会を沖縄で開催した（2013年、15年）。そこで、日本の教会は沖縄にどう関わってきたのか、キリスト教宣教と植民地主義をどう捉えるのか、キリスト教の福音また終末論的信仰に立って教会形成がなされているかなど、聖書の読み方そのものが問われた。私たちは沖縄からの真摯な問いかけや呼びかけを受けとめ、応答する責任の自覚を与えられた。沖縄をはじめアジアの人々と将来に向かって隣人として生きようとする時、まず、沖縄の視点から歴史をとらえ直し、政治的社会的倫理的な問い直しと具体的な行動をとることが重要であろう。神の歴史に参与する我々は、抑圧され苦しみの叫びをあげる人々の訴えに耳を傾け、その呼びかけに主体的に応える責任がある。それが「本土」に生きるキリスト者の使命である。

過去の悲惨な出来事は、そこから学び、新たな過ちを防ごうとするすべての人々に記憶されることを求める。悲痛な叫びや証言を聴き、記憶する責任は、国を越え、民族の区別を越える。大切なことは、隠れている事実を白日の下に取り出し、現実を直視し、記憶を風化させないことである。我々は歴史を導くこの神の前に畏れおののきつつ、目の前にある状況や現実我真摯に向き合う者であり続けたい。

平和は、我々人間に与えられた神の戒めであり、破られてはならない教えである。この平和と、不信の上に成り立つ「安全保障」はまったく異なるものである。我々は、軍事力による虚構の「安全保障」を破棄し、非暴力によって正義に根ざした平和を実現する歩みへと勇気をもって踏み出すべきである。

日本政府（国）は、沖縄県民の総意に根ざした辺野古新基地反対の叫びに蓋をするかのごとく、機動隊の動員など暴力による弾圧を繰り返している。「本土」に住む我々キリスト者は、この暴挙に抗議し、普天間基地の県外移設と新基地建設を止める闘いを今後も継続する。この闘いを通して、植民地支配という取り返しのつかない罪を自覚せずにこれまで来てしまった我々日本人が自らの罪と向き合い、神と隣人との前に悔い改め、沖縄の人々との連帯を大切にしつつ、いま置かれた場において正義を伴う平和を創り出す者とされたいと願う。そして、神が創られた環境、人間を含む全ての被造物のいのちと尊厳を尊重する社会、共同体(神の国)の実現を目指してともに歩むことをここに宣言する。

叫びに応じて下さる神さま、

み国が来ますように。

みこころが天に行われるとおりに地にも行われますように。

どうか私たちをあわれみ、あなたの平和の器として用いてください。

2016年1月11日

富坂キリスト教センター リトリート参加者有志（五十音順）

荒瀬牧彦、遠藤潔、岡田 仁、唐澤健太、汐碓直美、竹佐古真希、星出卓也、三村 修、与那城初穂